In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	先端的都市研究ブックレットシリーズの刊行に寄せて / はじめに / 目次
Author	阿部 昌樹, 中川 眞
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 29 巻
Published	2022-03-15
ISBN	978-4-904010-44-0
Type	Others
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	阪神虎舞の誕生 ： 被災地芸能の文化的脈絡の拡張
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

URP 先端的都市研究シリーズ 29

阪神虎舞の誕生

被災地芸能の文化的脈絡の拡張

日髙 真吾・橋本 裕之・中川 眞　編

先端的都市研究ブックレットシリーズの刊行に寄せて

本シリーズは、大阪市立大学都市研究プラザを拠点として取り組まれてきた先端的都市研究の成果や、それを踏まえた教育実践の成果を、多くの人々に共有していただくことを目的として刊行するものである。

都市研究プラザは、大阪市立大学が創設以来蓄積してきた「都市研究」の実績をもとに、2006 年 4 月に開設された。「プラザ」という名称を付したのは、研究者だけではなく、都市において様々なまちづくりの実践に取り組む人々もそこに集い、相互に刺激を与え合い、新たなアイデアを産み出すことができるような「広場」としての役割を果たしていきたいと考えてのことであった。

その後、2007 年度には、文部科学省が、我が国の大学の教育研究機能の一層の充実・強化を図り、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、もって、国際競争力ある大学づくりを推進することを目的として創設した、グローバル COE プログラムの拠点のひとつに選ばれた。そして、2007 年度から 2011 年度までの 5 年間、文部科学省の財政的支援の下に、「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」をテーマとする研究拠点形成推進事業に取り組んだ。その成果を受け継いでさらに、2014 年度には、文部科学大臣より「共同利用・共同研究拠点」としての認定を受けた。現在は、この認定を踏まえて、「先端的都市研究拠点」という名称を掲げ、全国の関連研究者のコミュニティが都市研究プラザを拠点として、大阪市立大学がこれまで蓄積してきた都市研究の知的リソースや人的・組織的ネットワークを活用し、最先端の都市研究に取り組んでいただけるよう、そのための基盤整備に努めているところである。

その一方で、研究者とまちづくりの実践に取り組む人々がともに集うことができる「広場」でありたいという都市研究プラザ創設の理念もまた、この間一貫して維持されてきた。この理念に基づく研究者とまちづくりの実践者との協働は、大阪市立大学のキャンパスにおいてのみならず、「現場プラザ」と名付けられたサテライト施設においても多彩に展開され、様々な成果を挙げている。また、ソウル、台北、香港、バンコク、ジョクジャカルタ等の海外の諸都市に設

立した海外センターや海外オフィスを拠点として、それらの諸都市を基盤として活動する研究者やNPO等との協働にも取り組んでいる。

社会に開かれた「広場」において、まちづくりの実践から学び、その成果をまちづくりの実践へと還元していくような研究を継続していくことこそが、大阪市立大学都市研究プラザが目指すところである。本シリーズの刊行も、そうした目的を実現するための取り組みのひとつである。本シリーズが、大阪のみならず全国各地において、まちづくりの実践に活かしていただけたならば、これに優る喜びはない。

大阪市立大学都市研究プラザ所長
阿部 昌樹

はじめに

阪神虎舞とは神戸市長田区にある NPO 法人 DANCE BOX に拠点を置く芸能集団で、2018 年に発足した。虎舞は三陸沿岸部において演じられる郷土芸能で、主として海上の安全を祈願する舞である。虎舞は日本全国に散見されるが、本ブックレットでいう虎舞とは岩手県の旧南部藩の領地にて継承されているものを指し、虎頭を操作するもの、尾を操作するもの、２人１組となって演じられている。三陸沿岸部には多くの団体があり、子どもからベテランの高齢者まで、幅広い年齢層によって演じられている。その虎舞の関西における伝承はなく、阪神虎舞が三陸の虎舞を受け継ぐ唯一の団体である。なぜ虎舞が関西にあるのか、その起源についてご紹介する。

最初の登場人物は橋本裕之と中川眞である。2011 年３月 11 日に発生した東日本大震災は巨大な津波を擁して太平洋岸を破壊し、人や建物のみならず共同体を根こそぎ倒していった。当時、盛岡大学の教員であった橋本は岩手県の文化財保護審議委員でもあり、無形民俗文化財が被った影響を調べる立場にあった。沿岸部を訪ねると、「調査」といったルーティンの対応では到底収まりきれない現実に直面した。被害状況を把握するというよりは、どうやって無形文化財を立て直していくのか、それを地域社会の復興とどう連動させていくのか、といった問題領域へといきなり引っ張られたのである。橋本から呼びかけられた中川が関西から合流し、「芸能文化による地域の復興に寄与する」というテーマで、この大震災との関わりを始めた。

国の対応は、有形文化財のレスキューが先に走り始め、無形文化財は後回しという状況になっていたので、我々は様々な民間財団や機関などに働きかけ、支援を訴えた。特に橋本は、三陸沿岸で申請書記入のための膨大な事務仕事をこなしながら、先程のテーマのターゲットとして下閉伊郡普代村の鵜鳥神楽の復興に助力した。神楽宿が全滅に近いなか、関西に招聘して活動の停滞を防ぐという手法をとった。やがて三陸を歩き続けた橋本は大槌町にて、復興支援に走り回る大槌城山虎舞と出会った。それはまさに文化が人々を励まし、癒し、そして心をつないで復興への道のりを後押しする活動（運動）であり、その総帥が城山虎舞総会長の菊池忠彦氏であった。

緊急事態の時間を過ぎると、現地はまだまだ復興がなされていないのに、他の地域の人々の関心や記憶は徐々に薄れてゆく。それは大袈裟に言えば、被害を受けていない地域が被災地を切り捨ててゆくプロセスのようにも見える。被災地と繋がり続けること、それは日本全体として格差を生むことを少しでも押しとどめ、同時に辛い経験を共有することによって、来るであろう次の災害に備える、という機序の自覚にもなってゆくはずである。そして我々のテーマは「震災の記憶の風化に抗う」へと移っていった。

その方法論として、芸能の移植を考えたのであった。震災後に東北から多くの芸能団が関西にやってきて、その姿を見せてくれた。生の迫力ある演舞は、関西の人々に東北の人々の肉体や精神を感じさせ、被災地の人々がいまここにリアルに居るという感銘と共感を与えてくれた。遠くの地に思いを馳せさせてくれた。確かに関西と東北は繋がりかけた。しかし現実的な話として芸能団体を呼ぶにも多額の費用がかかる。被災から時が経つと、資金の調達はだんだん難しくなる。だったら、関西で東北の民俗芸能を上演できる団体を作り、常に関西で上演し続けることによって、忘却とか風化を防ぐことはできないだろうかという問いへと導かれていったのである。そして、そのパートナーとして考えられるのが大槌城山虎舞だったのだ。

それ以後の経緯については本冊子の橋本論考に詳しい。芸能の移植はある意味で、新しい保存の方法である。そういう機縁で我々は国立民族学博物館の保存科学の泰斗である日髙真吾氏と繋がった。また移植後の活動基盤の一つとして新作の創造が考えられ、その専門家である神戸大学の関典子氏にも加わっていただいた。

本冊子では、前半に３つの座談・討論会の記録を配し（2021 年 12 月、2017 年３月、2021 年３月の順）、後半に論考を置いた。阪神虎舞は出発したばかりであり、終着点は全く見えない段階であるが、東日本大震災が生んだ一つの文化運動として、ここに初期の記録をとどめたいと思う。　　中川眞

目次

〔報告〕

第１章　報告会「虎舞を演じてきて」（2021）
文、森山真由子、今井美帆、村上和司、遠藤遼之助、川端克則、山本和馬、井原未来、橋本裕之、関典子、中川眞　1

第２章　みんぱく研究公演「城山虎舞 .ﾐみんぱく」（2017）
日髙真吾、菊池忠彦、笹山政幸、橋本裕之、中川眞　17

第３章　阪神虎舞みんぱく公演（2021）
日髙真吾、寺村裕史、橋本裕之、中川眞、菊池忠彦、金﨑亘、笹山政幸、山本和馬　43

〔論考〕

第４章　住民と協働する地域文化再生の試み
日髙真吾　67

第５章　芸能伝承・二次創作・動態保存 ―阪神虎舞の理論的挑戦―
橋本裕之　81

第６章　岩手の芸能が関西に移植されるまで
中川眞　117